

佐渡西三川砂金山の歴史地理

小菅 徹也

Tetsuya KOSUGE

佐渡の金銀鉱山といえば誰もが大佐渡相川町の佐渡金山（相川金銀山）を思い浮べる。しかし佐渡で最も初期に発見されたと考えられるのは小佐渡の西三川（にしみかわ）砂金山である。平安時代に発見されたと考えられるこの砂金鉱床はその後いくたびもの盛衰を繰り返してきた。最近の地質学的再調査の結果によると西三川鉱床は少なくとも数トンの金を産出したと考えられ、日本最大級の山砂金鉱床であることが判明したという。筆者が砂金山の歴史地理に興味をもち、調査を始めてから十数年になるので、口絵と本文（32頁から43頁）によりその途中結果を示させて頂くことにした。地質学的側面について種々の疑問に答えて下さった三菱金属 ㈱の佐藤憲隆氏、この原稿を書くことを助めて下さった地質調査所の浦辺徹郎氏に感謝したい。



↑写真1 西三川の砂金：砂金山重世話曲を勤めて閉山を迎えた金子勘三郎家所蔵の代表的な砂金。先先代が金山役人から記念に買ったものという。なお、謡曲の坂ではこぶし大の金塊が掘り出されたと云うし、桃大、栗粒大のものは珍しくなかったと伝えられている。（スケールの目盛1mm）



←写真2

西三川砂金山使用の法板：桐の一枚板 板の厚さ2.7cm 横50cm 縦34.5cmの法板。所有者真野町大字西三川 松田寛氏（現在佐渡博物館に依託展示中）。江戸時代西三川砂金山で使用した法板はこれと金山麓川の子清太郎氏所蔵（桐の一枚板 2.8cm×53.3cm×35cm）の二枚だけとなった。



↑写真3 「今昔物語」の産金舞台：西三川川中流域の医王寺前面と安楽寺跡周辺一帯の砂金山産出地。段丘上には 中世の村殿（土豪）西三川殿（本間山城興一重頼）の城跡「城ヶ平」がある、安楽寺は城主の一族かと考えられている。



↑ 写真4 虎丸山：西三川砂金山中最大の砂金山。虎丸山中腹の肩の部分には、背後の海老根沢上流から引水した砂金用水の水を溜める虎丸山上堤があり、山裾には茶屋川から引水した下堤がある。放水時には二重の流となって谷川の土石を押し流すので、谷底の流し場を鉄砲場ともいった。



↑ 写真5 立残山：青池からの用水を45間（81m）の切貫で井ノ上沢に引水し、さらに等高線に沿って時坂中段の受堤に導いて立残山の砂金を洗い取った。「タテノコシ」は中世武士の鎧（かぶと）という意味か、でなければ掘り残して切り立った山という意味かと思っていた。しかし、今回山頂部の状況を写真に撮って見て、虎丸山以下の砂金山の下戸層と相通するのは何故かと考えるようになった。頂上部には堅坑状の穴もあり、立谷（＝石英脈）を掘った形跡もあるので田切頭銀山、大須銀山、花見沢、小立沢山などの田坑が砂金山に近接して存在する意味を併せて再考してみたい。



↑写真6 中柄山：筑後山ともあり 相川金銀山初期の有力山主 早川筑後が関係していた山と考えられる。 山裾の流し地一帯が4貫匁の砂金運上をした時期があったものと思われる。 この頃の砂金の生産額は運上額の3倍はあったと考えられる。



↑写真7 虎丸山裾の茶屋川にて：鉱山地質学会のあとで西三川砂金山を検分した先生方 さすがにお手並みあざやか。